内藤湖南未収録文集

はじめに

一　『内藤湖南全集』未収録文章収集の経緯と趣旨

本著『内藤湖南未収録文集』（以下『未収録文集』と略）の刊行は、河合文化教育研究所に所属する「内藤湖南研究会」の編集によるものであり、その組織的な収集作業は二〇一〇年一〇月にさかのぼる。当時、本研究会は『内藤湖南の世界』（二〇〇一年三月）、「特集　内藤湖南研究」（『研究論集』第五集、二〇〇八年二月）を発表していたが、それらを継承する新たな論集刊行をめざしていた。その前提作業の一環として『内藤湖南全集』（以下『全集』と略）未収録文章収集の必要性が浮上したのである。

収集作業は、『全集』第一四巻巻末に示された「著作目録」を参考に「未収録文章」一覧を作成、それに沿って会員が情報を提供し合い、諸大学・公共図書館等に依頼して文章を複写し、また写真撮影し、それらを随時会員に配布するとともに事務局の助けを得てデータ化する、という形で始められた。データ化が進められたのは未収録文章整理の必要性からも、また研究者の便宜のためにもいずれは公表・活字化が望ましいと考えられたからである。

しかし文章収集及びデータ化の過程で、作業は予想以上に時間を要することとなった。新聞・雑誌の検索、関西大学図書館「内藤文庫」（以下「内藤文庫」と略）や国立国会図書館での検索を通じて、『全集』の「著作目録」には示されていない厖大な文章群の存在が明らかとなり、あらためて収集・活字化の方針が問われることになったからである。たとえば『萬報一覧』や『大同新報』の時事関係記事をどう扱うか、『日本人』『亜細亜』におけるペンネーム記事をどう扱うか、大正期の新聞掲載文章や談話記事をどう扱うか、などである。また最終段階の二〇一六年に入って、中川未来『明治日本の国粋主義思想とアジア』（二〇一六年二月）、鹿角市教育委員会『内藤湖南・十湾書簡集』（同年八月）、礪波護『敦煌から奈良・京都へ』（同年一〇月）、高木智見『内藤湖南』（同年一一月）等で示された『全集』未収録文等をどう扱うかも大きな問題となった。そのため後述するように、収集文章の刊行には一定の限定方針を採用せざるを得なかったが、それでも、本『未収録文集』は採録文章の表題総数三二七篇、九〇〇頁に及ぶ大部の書物となってしまった。その内訳は『全集』「著作目録」に示された未収録文章のうち数篇を除く一五七篇と今回新たに発見された一七〇篇の文章である。

この間、二〇一三年六月、研究会を主導された谷川道雄先生が急逝され、会員が茫然自失の状況に投げ出されるという事態にも直面せざるを得なかったが、ようやく先生のご遺志を形にする日を迎えることができたというのが実状である。

このような経緯を振り返るとき、内藤湖南（一八六六～一九三四）に関する史料を収集し、論集を含め更なる研究深化に活用できるものとして提示するという本書の意図も完全に達成されたとはいえないが、『全集』「著作目録」に示された未収録文章をほぼ網羅し、目録不掲載の多くの文章を集め得た点で、本書刊行の最低限の義務は果たせたと考えている。したがって本書刊行の意義もまずこの点にあると思われるが、それにとどまらない点もあると考えられる。

「あとがき」でも述べるように、たしかに湖南の基本的な著作と諸文章は『全集』に収録されている。しかし、未収録文章は、後述するように、雑誌『亜細亜』掲載のような多くの短文「批評」を含め、諸紙誌に登場する学術関係文章や時事に関する文章が大半を占めている。したがって未収録文章を検討することによって湖南思想に関する新たな知見がもたらされることは確実であろう。

とくに近代日本、東アジア史における内藤湖南の位置に思いを馳せるとき、時論等の収集は単に『全集』未収録分の補完というにとどまらない。内藤湖南は、戦前期を代表する言論人・時論家であり、独創的な東洋史理解を展開した史論家・歴史学者でもあった。しかも明治中期から大正末期にかけて東アジア情勢への提言を発し続けた湖南に対する歴史的評価が未だに確定していないという現状を踏まえるならば、本書採録の諸文章によって、操觚者として出発しながら歴史学者、歴史思想家へと活動を深めていった経緯やその思想世界の解明が進められるであろうし、同時に近代の日中・日朝関係、さらにはロシア・英米等を含めた東アジア情勢のより深められた理解が可能となるであろう。本書採録文章には国際的動向を前提にした中国情勢分析や朝鮮に関する文章も多いのである。

もちろん、湖南思想の重要性に注目するならば、その解明によってさらには日本の侵略を被った中国・朝鮮とどう向き合い、どのような関係を構築していくべきか、という現代の課題にも新たな視点がもたらされる可能性も考えられる。不完全とはいえ、本書はそのために不可欠な参照文章群である。当然、本書が近代東アジアにおける負の遺産をより鮮明にする側面もあるであろう。しかしそのような事態も、数千年単位で歴史を捉えようとしていた湖南の意に反することにはならないであろう。

二　編集の方針と構成

本書は以上のように内藤湖南研究の深化と、そのもたらされる意義を想定して編集されたのであるが、収集文章の採録については一定の取捨選択がなされている。第一に、『全集』「著作目録」に掲載されていても、湖南が執筆した文章ではないことがわかるもの、書簡・漢詩・跋文・賛および教科書類、すでに活字化された文章については、活字化が一部分にとどまっている文章を除いて原則的に採録していない。したがって「著作目録」に示されていても、「藤井氏蔵東坡尺牘跋」（一九二二年）などは採用していない。ただし、湖南が代筆した文章と考えられるものについては、史料論的検討が必要であるが、参照に値すると考えられるため極力採録した。

第二に「著作目録」不掲載の新聞・雑誌等への掲載文章についても若干の取捨選択を行っている。その主な理由は採録予定文章が大幅に増加して頁数に限界が生じたことによるが、加えていまだ未発掘の遺文がかなり残されており、収集完了のめどが立たないということがあげられる。そこで雑誌『日本人』『亜細亜』掲載文章については筆名のわかるものや確証のあるものなどの理由で採録数を絞らざるを得なかったし、『萬報一覧』『大同新報』掲載の文章では湖南の文章と確定できないもの、さらにいえば、『全集』掲載文章と同趣旨の文章などは採録を見送らざるを得なかった。逆に、湖南が一書として刊行する際や『全集』に収録する際に修正が施されている文章の初出文章などは、湖南の執筆姿勢や推敲過程を理解する意味もあって可能な限り採録している。

なお、書簡については、青江舜二郎『竜の星座――内藤湖南のアジア的生涯』（一九六六年一一月）、岡村敬二「内藤湖南と日満文化協会」（京都学園大学人間文化学会紀要『人間文化研究』第三号、二〇〇〇年七月）、同『日満文化協会の歴史』（二〇〇六年一〇月）、名和悦子編「内藤湖南宛書簡集（明治・大正）」（河合文化教育研究所『研究論集』第五集、二〇〇八年二月）、同「内藤湖南宛書簡集（昭和）」（河合文化教育研究所『研究論集』第七集、二〇〇九年一二月）、鹿角市教育委員会『内藤湖南・十湾書簡集』（二〇一六年八月）、書論研究会の『書論』第一三号（一九七八年一一月）以下などを参照していただきたい。同様に漢詩・漢文については、金程宇「『内藤湖南全集』補遺」（『域外漢籍叢考』所収、中華書局、二〇〇七年）、同「内藤湖南の漢詩について」（『文学』第一〇巻第三号、二〇〇九年五、六月）、印暁峰点校『内藤湖南漢詩文集』（広西師範大学出版社、二〇〇九年一月）、銭婉約『内藤湖南漢詩酬唱墨迹輯釈』（国家図書館出版社、二〇一六年九月）を参照されたい。

次に本書の構成であるが、内藤湖南の経歴・執筆活動・思想の推移などを考慮して三期、三部構成を採用している。第Ⅰ部は一八八七年八月、湖南が両親に無断で上京し、大内青巒主宰の仏教雑誌『明教新誌』の記者となり、三年後の一八九〇年一〇月に『三河新聞』の主筆となり、同年末同紙を辞すまでの時期である。第Ⅰ部が湖南の操觚者としての基礎固めの時期であったとすれば、第Ⅱ部は一八九〇年末、『三河新聞』を辞し、帰京して『日本人』記者となり、『大阪朝日新聞』『萬朝報』記者として活躍する本格的な操觚者時代で、第Ⅲ部は一九〇七年一月以降、一〇月、京都帝国大学文科大学の史学科東洋史講座の講師となり、一九三四年六月に死去するまでの大学人及び余生としての時代ということになる。以下、湖南の置かれていた状況を含め、簡単に採録文章の概要、採否の経緯などについて説明を加えておこう。

三　第Ⅰ部採録文章の概要及び採否の経緯

ここでは、一八八七（明治二〇）年八月に上京し、雑誌『明教新誌』の記者となって以降の一八八七年一二月から一八九〇年一一月まで、雑誌『明教新誌』『萬報一覧』『大同新報』『江湖新聞』及び『三河新聞』に執筆した文章、計七九篇を採録している。多くは「内藤文庫」及び国立国会図書館の所蔵史料に負っている。

『明教新誌』　『全集』第一巻「あとがき」によれば、湖南は『明教新誌』に数篇の文章を書いているようであるが、「著作目録」に明示されているのは、『全集』掲載の「明治二十一年来れり」（一八八八年一月四日）と未収録の「宗教家と教育者」（一八八七年一二月一八日、一八八八年一月八日）の二篇の文章だけである。しかし、『内藤湖南・十湾書簡集』によれば、「著作目録」には示されていないものの、上京後の最初の文章は「佛教家は宜く耶蘇の恩を拜謝すべし」（一八八七年一一月一〇日）であったことがわかる。そこで本書には「宗教家と教育學」を加えた二篇を採録している。なお、「宗教家と教育學」は、青江舜二郎の『竜の星座』に第二三〇一号分が掲載されているが、第二三〇九号分は掲載されていない。そのため、本書には両号とも採録している。

『萬報一覧』　『明教新誌』編集に関わった実力を評価されたのであろう、一八八八年に入ると、湖南は『萬報一覧』の編集に携わることとなった。これも大内青巒主宰の雑誌である。『全集』第一巻「あとがき」によれば、第一六四号（一八八八年一月一五日）から、湖南は編集名義人となり、新たに設けられた「時事評論」欄を担当することとなる。これは第一八九号（一八八八年九月二五日）の最終号まで続いたとされているが（『全集』第一四巻「著作目録」六七四頁）、『全

集』では「時事評論」欄を設けるという「萬報一覧改正の旨趣」（第一六四号）と四篇の「時事評論」、「小世界」（第一六八号）、「防禦論」（第一六九号）、「空想の国民」（第一七〇号）、「新雑誌及び新聞」（第一七三号）の計五篇しか採用されていない。『全集』「著作目録」には、「時事評論は以後明治二十一年九月二十五日発行の第百八十九号に至るまで毎号執筆しているが、いま細目を省略する」（六七四頁）とある。

『萬報一覧』の「時事評論」欄はすべて無署名記事であり、湖南が担当したとはいうものの、すべてが湖南の文章であるとは断定できない。そのため、本書では「著作目録」が掲載する第一七三号までの記事だけを採録した。内容は府県会や市制、徴兵令改正論議や国家予算、国会開設に向けた政治動向、海外情勢などに及んでいる。なお、第一七一号の「空想の国民」は、増補されたものが新聞『みかは』に寄稿され、それが『全集』第一巻に収録されているため採録は見送った。採録文章数は、第一六五号から第一七三号までに掲載された二一篇である。

『大同新報』『江湖新聞』『三河新聞』　『大同新報』も、大内青巒が組織した「尊皇奉仏大同団」の機関誌（半月刊）である。『全集』第一四巻「年譜」によれば、湖南が同誌の編集に関わったのは一八八九年五月とされている。『萬報一覧』が廃刊になったのは前年九月と考えられているから、湖南のこの間の動向はよくわからない。

湖南の同誌における執筆範囲は、社説にあたる「大同新報」欄、「時事」欄の他に、雑文、書評、埋め草に及んでいる。「雑文以下のものには、同憂生、加一倍子、あやめ、痩竹処主人、老朽子、不癡不慧主人、冷眼子、あまの子、しぐれ、落人後子、湖南、酔夢子などの筆名を用いている」（『全集』第一巻、六九一頁）とされるが、『全集』には一二篇しか収録されていない。そこで、『全集』未収録の文章については、「著作目録」掲載分を中心に五〇篇を採録した。ただし「著作目録」には不掲載であるが、「再び信教の自由に就て」（第七号）、「僧侶の被選権」（第九号）、「政治界に於ける僧侶の運動」（第二四号）、「反動の大勢」（第三一号）の四文章だけは、「内藤文庫」所蔵の冊子に付されている「しるし」や「書き込み」などが湖南執筆を示すものと推定されるため採録した。※

※「内藤文庫」所蔵の『大同新報』冊子によれば、「信教の自由に就て」（第六号）には「後藤祐助」との書き込みがあるため、本書には採録しなかった。また、鹿角市教育委員会『内藤湖南・十湾書簡集』（五一頁）によれば、『全集』「著作目録」では湖南の文章とされている「我同胞に望む」（『大同新報』第一九号）が、後藤氏の文章とされているため、同様に採録しなかった。

立憲自由社の『江湖新聞』からは一篇を採録したが、これは「著作目録」には示されていない。同紙は一八九〇年二月一一日創刊で、国立国会図書館に第一一六号（一八九〇年一二月一六日）まで所蔵されている。『立憲自由新聞』は同紙の後継紙とされる。

『三河新聞』掲載の文章について。『全集』第一巻「あとがき」によれば、本紙執筆の文章もほとんどが無署名であり、「歩虚小仙」の筆名を用いたものもあるとのことであるが、原紙の保存状態を考慮して、「著作目録」に示された五篇の収集に絞り、不完全ながら四篇を採録した。未採録の「宗教」（第二二・二三・二四号掲載分）に関しては、「内藤文庫」目録には記載されているが、確認することができなかった。全国的にも所蔵機関を確認することができなかったため、掲載を断念した。

ここでは『大同新報』掲載文章に焦点をあててその特徴を概観してみたい。『大同新報』時代以降の文章においても、彼の文章の多くは時事論が中心である。とはいえ、その論調には「尊皇奉佛者が條約改正に關する意見」（第一三号、一八八九年九月一六日）などのように、湖南自身が「尊皇奉仏団」を担っているという自負を前提とした論説的文章が多くなるという傾向がみられる。たとえば時事論の中心をなす国会開設に向けた政治動向に関する文章群には、政府批判、条約改正論、僧侶の被選挙権などがあるが、それらは憲法・大臣責任論などと関連させて論じられたり、欧風をめぐる思想潮流と制度的国家構築との乖離という現状分析などとも関連して論じられている。

同様に仏教への関心及びキリスト教論や文芸批評なども注目すべき点がみられる。大同団を背負う湖南の筆鋒がキリスト教徒排撃に向かうこともあるが、彼はキリスト教排除やその教義を否定するような主張をしているわけではない。むしろ「殷の鑑遠からず」（第九号、一八八九年七月一六日）のように他山の石として学ぶことを主張したり、ユニテリアン教徒の考えが仏教思想に似ているとして期待する文章などに特色がみられる。これは、彼のキリスト教批評が単なる批判ではなく、同時に仏教界の動向を前提にその反省・革新を促すもの、東西両文明理解の深化へとつながるべきものと想定されていたことをうかがわせるものである。

たとえば湖南は、のちの中西牛郎（うしお）の『新仏教論』をとりあげた文章（第Ⅱ部、『亜細亜』第一巻第三一号、一八九二年一月二五日）で、彼を「新仏教軍の勇将」と絶賛しているが、湖南は自身の「仏教の前途」（第二七号、一八九〇年五月一〇日）や「青年の仏教徒」（『全集』第一巻所収）はこの書と同一の議を論じたとしている。「青年の學佛者に物申す」（第八号、一八八九年七月一日）も含め、今後の研究に参考にされるべ

きであろう。

仏教理解に関連して湖南の文芸批評についても興味ぶかい点がうかがえる。今回採録した「文學上佛教の功績」（第一八・一九号、一八八九年一二月一〇・二五日）や「日本文學と宗教と」（第二四・二六号、一八九〇年三月一〇日・四月二五日）などは、日本文学への仏教の影響を論じたものであるが、単なる文芸評というより、のちの『近世文学史論』につながる視点が準備されている文章とみることもできる。

最後に次の二点に注意を促しておきたい。第一は、ただ一篇ではあるが、西村茂樹の「日本弘道会」との関係を示す「弘道の一手段」（『日本弘道会叢記』一八九〇年三月）を見出すことができたことである。それは湖南の人的交流を示すだけでなく、「宗教家と教育學」（『明教新誌』第二三〇一・二三〇九号）や、「人物」（『三河新聞』第二五～三〇号、一八九〇年一一月一六～二二日）などにつながる文章ともいえ、当該期の彼の関心の一端をうかがわせるものといえよう。

第二は「文明」や「文化」の用語が『萬報一覧』や『大同新報』にすでに登場していることである。本書に採録した文章でいえば、「文明」は、一八八八年一月の「府県会の紛紜」（『萬報一覧』第一六五号）に、「未開時代」に対する「今日文明の世界」として登場している。また「文化」は、一八八九年五月の「國家の將さに興らんとする必ず禎祥あり」（『大同新報』第五号）に「一千数百年来、己が祖先の文化を資け」として登場している。湖南の「文明」・「文化」理解が彼と『日本人』グループとの関係や壮大な東洋史像の展開と密接に関連していることはよく知られている。しかし早期の文章にそれらが登場することは、それらが早くから自身の思想関心の一つでもあったことを物語っているであろう。

四　第Ⅱ部採録文章の概要及び採否の経緯

ここでは一八九〇（明治二三）年一二月から一九〇六年末までの文章一二一篇を採録した。翌年一〇月に京都帝国大学の東洋史講座講師となるので、一九〇七年一月以降の文章は第Ⅲ部とした。関連する紙誌は、『台湾日報』『萬朝報』『大阪朝日新聞』『日本』『秋田魁新報』、『日本人』（第一次～三次）『亜細亜』『二十六世紀』『太陽』『東洋戦争実記　3』『改正条約実施内地雑居準備会雑誌』『日本之文華』に及ぶ。なお、書論研究会の『書論』第一三号（一九七八年一一月）以下には、『全集』未収録文章・書簡等がかなり掲載されているので参照されたい。

『日本人』（第一次）『亜細亜』　一八九〇年一一月、湖南は東京に呼び戻され、一二月から政教社記者となる。『三河新聞』主筆をわずか二ヶ月で卒業したことになる。解題にも

示したように、湖南は半月刊から週刊となった雑誌『日本人』の誌面改革の一環として起用されたのである。度重なる政府の弾圧で、『日本人』（第一次）は一八九一年六月に廃刊となるが、湖南は後継誌『亜細亜』の編集を担いつつ一八九三年三月の退社を迎えることになる。※

※湖南の政教社退職と大阪朝日新聞社入社については、『全集』第一四巻の「年譜」等はそれぞれ一八九三年一月、一八九四年七月としているが、千葉三郎『内藤湖南とその時代』（一九八六年一二月）は、三宅雪嶺宛て書簡を根拠に、退社は一八九三年三月とし、大朝入社を九四年九月としている。朱琳「中国史像と政治構想――内藤湖南の場合（一）」（『国家学会雑誌』一二三巻第九・一〇号、二〇一〇年一〇月）も、退社については三月とし、入社についても、『村山龍平伝』『上野理一伝』などを根拠に九月説を支持している。本稿もこれらに従う。

この間、湖南が執筆した文章は主に論説と学芸記事で、『全集』掲載分を含めて、『日本人』からは七篇、『亜細亜』からは九〇篇を超える文章を見つけることができた。これらの収集文章から『全集』収録文章の特色をみると、論説については『亜細亜』掲載の論説はほとんど『全集』に収録されているものの、史料論的問題があったためか、『日本人』の論説はほとんど収録されていないことがわかる。したがって今後の研究深化を待つ意味で、『日本人』からは「著作目録」に示された五篇を含む七篇すべての文章を採録した。採録文章の内容は主に第一議会に関するものであり、日本人の天職論も登場している。

学芸記事については、『亜細亜』「批評」欄での新刊書の書評が『全集』にほとんど収録されていないため、湖南のペンネームと確定できるもので、思想形成とも関連するであろう点を考慮して四八篇を採録した。政教社時代の前半も第一期に続く猛勉強期であったことがよくわかる。なお『亜細亜』からの採録文については、『全集』収録済みとされているものの欠落した文章、「坐右記」（三日分）がある。「坐右記」は『亜細亜』第二八号から六〇号にかけて一四回連載され、「著作目録」では『全集』第一巻に全部収録されているように示されているが、『全集』に掲載されているのは、第四九号までの一一回分である。したがって本書には一二～一四回分を採録した。なお、便宜を考えて解題に収集文章と採録文章の目録を示しているので、参考にしていただきたい。

『日本人』（第二次）『二十六世紀』『大阪朝日新聞』　湖南が一八九三年三月に政教社をやめたのは、郷里へ帰ることを考えていたためと考えられている（『全集』第一巻「あとがき」）。しかし、彼がそれを思いとどまったのは、『大阪朝日新聞』の客員高橋健三と知り合い、高橋の私設秘書のように

なったからであろう。高橋との縁で、湖南は一八九四年九月に『大阪朝日新聞』に入社する。

この間「著作目録」に示された湖南の文章は『全集』にほとんど収録されているが、それでも、『日本人』から一篇、高橋健三の個人誌ともいうべき『二十六世紀』から四篇、『大阪朝日新聞』から二篇、計六篇の文章を採録することができた。ここで注目されるのは、一八九四年八月の日清戦争勃発を受けて、篇数は少ないものの、『二十六世紀』に掲載された「朝鮮の經營」（第七号、一八九四年八月二五日）他三篇のように採録文章から湖南の東アジア情勢への関心がうかがえる点であろう。『台湾日報』主筆への転身はこの点と密接に関連しているであろう。

なお『大阪朝日新聞』に掲載された『全集』未収録文章として、本書では一八九四年一〇月の「大任を受くるの覺悟」及び一九〇二年の「銷夏錄」の二篇を採録したが、『書論』第一三号には「京都大学図書館紀年展覧会」（一九〇一年一二月一六日）、「文芸閣を哭す」（一九〇四年一〇月七日）、「国書刊行会に就て」（一九〇六年三月一一日）が収録されており、本書には採録しなかった。ただ注意を要するのは、湖南の大阪朝日新聞勤務が足かけ三年に及ぶことを考えれば、「著作目録」に示された『大阪朝日新聞』掲載文章があまりに少ないということである。無署名文章の検出と検討が今後の課題となろう。

なお、不採録とはなったものの、採否をめぐって研究会内で討議された文章が他にもあることにふれておきたい。それは「戦局善後策」（一八九五年六月二三日～九月七日）と「関西文運論」（一八九六年四月～一一月）である。これらは日清戦後の時期における湖南の時代把握や思想動向をうかがう上で重要な文章と考えられるが、前者については、湖南が執筆したとしても、自身の文章と言うより高橋健三の主張を代筆した性格が強いと判断したため、また後者については、分量が多く、それをかなり修正した経緯がみられるものの、『近世文学史論』が『全集』第一巻に収録されているため採録しなかった。

『台湾日報』『萬朝報』その他　一八九六年九月、高橋が松方正義内閣の書記官長に招かれて大阪朝日新聞社を退職すると、湖南も一二月に同社を退職、一八九七年四月に『台湾日報』主筆となり、翌一八九八年四月に退職して五月には『萬朝報』論説記者となる。

『台湾日報』記事については、前掲中川未来『明治日本の国粋主義思想とアジア』（二〇一六年二月）がふれており、『全集』未収録記事として一二篇が紹介されているが、文体から考えて湖南の文章かどうかについて会員内に疑問が残るものや破損文章を除き、九篇を採録した。

一八九八年五月の『萬朝報』入社と一九〇〇年四月の退

社、七月の『大阪朝日新聞』再入社、一九〇七年一〇月の京都帝国大学講師就任にいたるこの時期は、操觚者湖南の全盛期といってもよい。しかもこの時期は日本の台湾領有を前提に、満洲・朝鮮半島へも関心を強める日清戦後経営期、隈板内閣成立（一八九八年六月）から第二次山県内閣（一八九八年一一月～一九〇〇年一〇月）へと続く時期にあたり、朝鮮とは閔妃殺害事件（一八九五年一〇月）以降の一種断絶状況が続き、中国では戊戌の変法（一八九八年六月～）が始まるも、九月の戊戌の政変で変法派が敗北するという時期にあたる。

この時期の文章もほとんど『全集』に収録されているが、『萬朝報』の記事の多くが採用されていない。内容は、東アジア情勢に注目しつつ、政治外交、社会問題、文明論、歴史・学術研究など多方面にわたっている。したがって本書には「著作目録」に示された三六篇に加え、新たに確認された五篇を採録した。この時期には他に『日本人』（第三次）二篇、『太陽』『改正条約実施内地雑居準備会雑誌』『東洋戦争実記』『日本之文華』『日本』各一篇、『秋田魁新報』三篇などの未収録文章が見出されたため、さきに示した『大阪朝日新聞』記事を除いて努めて採録した。

日清戦争期以降の未収録文章で注意すべきは、対露関係を前提とした国内政治批評、そしてさきの「朝鮮の經營」（『二十六世紀』第七号）に続く「韓國に對する手段」（『萬朝報』一八九九年六月一六日）などの朝鮮問題や中国情勢への関心が色濃くうかがえる点である。

たとえば『全集』第二巻に収録された一八九八年の政局批評は、「憲政党の大敵」（七月五日）、「政党人士の不幸」（七月二一・二二日）、「財政の大英断」（七月二六日）などであるが、未収録文章としては、「進歩黨と提携するは伊藤内閣の利益なり」（五月一二日）、「憲政黨に失望す」（一〇月二一日）、山県内閣を批判した「政黨の最盛期」（一一月一六日）などがある。政局批評は一八九九年にも継続されていくが、同時に中国論が「清國最近の形勢」（一八九九年一月一四日）、「支那の現勢と我が外務の方鍼」（一月二八日）と本格化する。

一八九九年九月、湖南は初めて中国を訪問し、一一月の帰国後、中国改革への関心を一層本格化させるのであるが、その延長上に位置すると思われる一九〇一年の文章「内藤湖南氏の支那談」（『秋田魁新報』八月一四～一六日）や「支那改革に就て」（『同上』八月一六～一八日、二〇日）を見つけることができた。これらに今回採録した『萬朝報』の「馬山浦問題」（一九〇〇年一月八日）、「清國事變の眞相」（同年二月四日）や『東洋戦争実記 3』の「支那と西洋諸國との關係」（一九〇〇年七月二三日）を加えれば、世紀転換期における湖南の東アジア情勢理解や歴史学者湖南への経路はより明確になるであろう。

五　第Ⅲ部採録文章の概要及び採否の経緯

一九〇七（明治四〇）年一〇月、湖南は京都帝国大学東洋史学講師となった。学問世界に身を移して以降、彼の文章が以前にもまして学問研究に裏付けられる傾向にあることは「解題」でふれるとおりである。しかも辛亥革命の勃発という事態に直面し、中国情勢に関する文章もきわめて多い。

第Ⅲ部はこれらを含め、一九〇七年一月以後、一九三四年六月の死去にいたるまでの文章計一二七篇を採録した。関連する紙誌は『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』を中心に、『大阪新報』『大阪時事新報』『大正日日新聞』『関西日報』『やまと新聞』『京都日出新聞』『中外日報』『実業新聞』『九州日日新聞』『満洲日日新聞』などの各紙、『日本及日本人』『外交時報』『サンデー毎日』『太陽』『表現』『貨幣』などの諸雑誌及びパンフレット等である。これらの文章の探索については大学・図書館での探索に加え、「内藤文庫」、及び神戸大学電子図書館の情報に依るところが大きい。ただ、これらが『全集』に不採用となった理由についてはよくわからない。調査漏れに加え、『支那論』『新支那論』が刊行されていること等があげられるが、明確な理由は不明である。

なお第Ⅲ部の構成上の特徴は解題を二分して充実させた点である。当該期の重要性に加え、掲載紙誌が四〇を超え採録文章も多いため、それらを満洲・朝鮮問題や学問・文化・日本の政情に関する文章群と中国の政治情勢に関する文章群に大別し、解題もそれらに対応させて論じることにした。したがってここでもそれを踏襲して採録経緯や概要を説明しておきたい。

まず満洲・朝鮮問題に関する文章について。ここでは関連文章を可能な限り採録する方針を貫いた。たとえば「内藤文庫」に収蔵されている一九一八年一〇月の講演記録と考えられる「朝鮮の開國」は、活字化した紙誌等を見出すことができなかったため、同文庫の記者筆記原稿を活字化して採録した。ただ、「朝鮮の音楽」（『中外日報』一九一〇年六月二五～二七日）は、「余が観たる韓国」（一九〇七年三月、『全集』第六巻所収）と重複する箇所が多いため、採録しなかった。また、「古の満洲と今の満洲」（『雄弁』第四巻第八号、一九一三年八月）は、『東洋文化史研究』（一九三六年）に一部修正されて収録されているが、湖南の校閲を経ていないため、『全集』第八巻の『東洋文化史研究』には収録されていない。これについては、修正が施されて『全集』第六巻に収録された「満洲発達史序」などとも対照する意味もあると考え、今回採録している。

次に学術・文化に関わる文章について。帝国大学に勤務

し、湖南の関心が学問研究に向けられたことは、今回採録した、「日韓古史研究」（『現代思想二十一家講話』一九〇八年一〇月）、「内藤湖南博士談――奉天の古文書」（『秋田魁新報』一九一二年五月二九日）、「古書畫の變遷に就て」（『美乃世界』一九一二年七月一日）などに如実に表れているといえよう。

湖南のこの種の文章は、以後死の直前まで継続され、したがって採録した文章も多いが、それらの特徴としては、とりわけ研究対象が広範囲に及ぶということであろう。執筆対象は中国・朝鮮・日本に渉る考古史料や史書・古文書・人物論、絵画・書・音楽論、さらには仏教へと及んでいる。ただこのような文章群の中にあって、絵画論などに『全集』所収文章と同趣旨の文章がかなり見られるため、採録を見送ったものも多い。また『貨幣』掲載の「支那の古錢及金石に就て」は、誤植で文意が通じにくい箇所があるため、「内藤文庫」に残る校閲を試みたとおぼしき原稿を参考にして補った。

最後に『全集』未収録文章として際立っている中国情勢に関わる文章について。辛亥革命以降の中国情勢に関する新聞掲載文章、とくに『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』掲載分については「著作目録」の漏れが多く、採録した文章の大半が研究者の目に届いていない時論が多い。特に今回新しく採録した『やまと新聞』『大阪新報』『京都日出新聞』『大阪時事新報』『大正日日新聞』『満洲日日新聞』及び『外交時報』『太陽』掲載文章もすべて中国の時事問題と関連するものである。これらの文章が今後の研究に資するであろうことは疑いないが、ここでは採録文章の紹介を含めて三点を指摘しておくに留めたい。

第一は、湖南の中国情勢に関する文章は厳密に言えば昭和期まで及んでいるのであるが、実質的には一九二四年の『新支那論』で終わっていることが明白になったということである。当然、以後の文章は学術・文化に関するものが多くなるのであるが、湖南におけるこの変化が何を意味するのかについては、今後の課題として提起しておく必要があるだろう。

第二は、パリ講和会議期における湖南の東アジア情勢認識をうかがうことができる林長民（一八七六～一九二五）への反論文を四種採録できたことである。清末・民国初の政治家である林長民は早稲田大学に留学し犬養毅とも交流のあった人物で、パリ講和会議にも関与し、小冊子『敬告日本人』（一九一九年六月）を著して日本の対中国政策を批判した。湖南の文章はこの小冊子への反論である。詳細は解題に譲りたい。

第三は、梁啓超が一九二一年に行った講演「中国の領土の再確定説と国際的共同管理説」に対する湖南の批判文、「梁啓超氏の疆域論」（『大阪毎日新聞』一九二二年一月四日）を見つけることができたことである。すでに知られていた「梁啓超氏の非國際管理論を評す」（『表現』第二巻第三号、一九二二

年三月）は出版社側の校正ミスもあって、『全集』には収録されていなかったが、研究会で整理した文章が、『表現』次号での訂正と一致したため、これも採録した。湖南の梁啓超に対する批判文が揃ったことになる。

「はじめに」を終えるにあたってお願いしたいことがある。湖南評価にも関わることであるが、新聞等の談話記事については、湖南談話だけを抽出したものも多い。当時の時代状況をより深く理解するためには、掲載紙誌の当該箇所に当たっていただければ幸いである。

＊　＊　＊

本書を刊行するに際しては、関西大学図書館、同「内藤文庫」、龍谷大学大宮図書館、同志社大学附属図書館、同人文科学研究所、京都大学附属図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、東京大学文学部東洋史学研究室、米国議会図書館、国立国会図書館、国立台湾図書館、神戸大学電子図書館、秋田県立図書館、岩手県立図書館、大阪府立図書館、大阪市立中央図書館、京都府立図書館、京都市中央図書館、京都市右京中央図書館、山口県立図書館の諸機関、そして関西大学客員教授ジョシュア・A・フォーゲル、関西大学教授陶徳民、同藤田高夫の各氏には史料収集の面で便宜を図っていただいた。また鹿角市先人顕彰館の館長小田嶋隆一、高木英子両氏には貴重な助言をいただいた。厚くお礼を申し上げる。

（担当　八箇亮仁）